

「母のものがたり①」

高名 祐美

今年3月、私は61歳になった。母親が亡くなった年齢である。この年齢になって、母親が娘の私にしてくれたたくさんのことを思う。

小学生の頃は、妹とおそろいでオーダーメイドの洋服を着せてくれた。帽子、靴はデパートで買ったおしゃれなもの。近所にそんないでたちをしている子供はいなかった。私の嫁入り道具には、箆笥に布団に家電にたくさんの着物。私がお寺に嫁ぐことになったために、ことさらに着物や道具に力をいれたようだ。孫が生まれれば7段飾りのひな人形や孫の着物、大きな滑り台などなど。それらは私の孫にも使わせてもらっている。子供に費やすお金は、惜しまない、そんな母だった。

私にも娘が二人いるが、母がしてくれたようにはできていない。亡くなって24年になるが、母には今でも頭が下がる。61年という長くなかった人生の中で、母は、「母」として「祖母」として偉大だった。同じ年になって強くそう思う。

この節目に、母を主人公にしてジェノグラムを読み解き、母の家族のものがたりをたどろうと思う。

母は、養女だった。子供に恵まれなかった養父母が、父親の弟夫婦から、次女とし

て生まれた娘を生後間もないころもらいうけた。母は昭和11年生まれ。養父は戦死したために、あまり思い出はないらしい。養父の死後、理髪店をしていた養母は、なじみの客と再婚した。中学生だった母は、養母の再婚を受け入れられなかった。新しい父親（私の祖父）には、全くなじめず、養母（私の祖母）のことも、再婚を許せなかった。

経済的には恵まれていた。理髪店を営む母と、会社員の父親。そして一人娘。いわゆる「お嬢様」の生活だったと母を良く知る人から聞いたことがある。母の選んだ高校は、地元ではなく、電車で1時間かかる金沢の私立高校だった。兄弟姉妹はなく、両親の実の子ではないと知った母がしたことは、「家から少しでも離れて過ごす」だった。当時は一般的でなかった習い事をし、市外の私立高校へ通学し、両親にお金を使わせる。家にいる時間をできるだけ短くし、自分の意のまま過ごす。両親との会話は少なく、外との境界がゆるい家庭で母は育った。

母は、実の両親ともつながっていた。私が子供の頃、お盆になると父親の実家と母親の実家に必ず里帰りしていた。家にも祖父母がいた。「どうして私には3組の祖父母がいるのだろう」と疑問を母に問いかけ

たところ、母が養女だったと知らされた。母は実の姉弟とも付き合いをしていたが、あまり仲はよくなかった。母のすぐ下の妹は、養女となってお嬢様暮らしをしている母のことを相当うらやんでいたらしい。母の実母は美人で、二人はよく似ていた。高校卒業後、県職の公務員となった母は、自宅近くの保健所に勤務。そして、お見合いをして結婚、婿養子を迎えた。養父母とは同居、母 22 歳、父 25 歳だった。

<結婚の決定にまつわるエピソード>

母と父が銀婚式を迎えたころ。まだ独身だった私は、母に結婚を決めたいきさつを聞いたことがある。

私：お父さんとはお見合い結婚なんだよね。

母：そう。

私：初めて会ったとき、お父さんのことをどう思ったの？

母：お父さんは体育の先生だから、姿勢がすごくよかったのよ。座っている姿から、背が高い人だなあって。

私：お父さん、そんなに背は高くないよ。

母：そうなのよ。立ちあがったら、意外に背が低くてね。つまり、胴長だったのよ。

私：ふふ、だまされた？

母：そうね。でもね、顔はけっこう男前だった。

私：そうだね、若いころの写真、松田優作に似ているよね。髪の毛もふさふさして。

母：いまじゃ、剥げてしまったけどね。

私：結婚しようと思ったのは何が決めてだったの？

母：初めて金沢でデートして、お寿司をごちそうになってね。食べている途中に蠅

が私のお寿司にとまったのよ、そうしたらね、『それは汚いから、食べるのをやめなさい。』って言って、また新しく注文してくれたのよ。かっこつけてたんだわね、きっと。(笑い)でも、それがなんか素敵でね。男の人って、こんなふうにしてくれるのか、この人、頼れそうって思ったのよね。

私：へえ～。そんなことがあったんだ。お父さんかっこいいね。

母：結婚してから、同じようなことがあってね。その時は、その蠅を手で追い払っただけ。新しい料理は注文してくれなかったけど。そんなものなのよね、結婚は。

そんなエピソードがあったことを聴いて、ほほえましく思った。養父母と距離をおいてきた母が、父のどこに魅力を感じたのか少しわかったような気がした。母はかなりわがままで、ヒステリックなところがあつたが、父はそれを包み込む優しい人だった。結婚してからは、何事も夫に相談し、夫の決断にゆだねていたように思う。

一方の父は、美人でスタイルの良い母に一目ぼれだったらしい。(母から聞いた話)父は、9人姉兄の末っ子で、一人娘だった母のところに婿養子にくるのが前提だった。結婚に迷いはなかったらしい。

銀婚式のとくに父に、母親の魅力を聴いてみた。

私：お父さん、お母さんと結婚して 25 年だね。お母さんと出会ったとき、どう思った？

父：まあ、きれいな人だなと。

私：そう。おしゃれだしね。

父：お母さんは美人だぞ。悪いけど、おまえら（私と妹）よりもな。

私：あ、そう。私たちにはお父さんの血が混じっているからね。

父：まあ、そういうことだ。お母さんはダンスも歌もうまかったな。

私：私たちもお母さんに似ればよかったか。私はダンスもできないし、歌もうまくないわ。

父：まあ、仕方ないな。

私：では、銀婚式を迎えるにあたって、感想を一言どうぞ。

父：忍耐とあきらめの25年だった。

私：えっ！そうだったのか・・・

父の「忍耐とあきらめの25年」とは、意外な言葉でもあり、納得できる場所もあったりした。それは私の名づけのエピソードからも推察できる。

母の原家族は、血のつながらない人の集まりだった。母は結婚して、子供ができて初めて「自分と血のつながる家族」をもった。しかし、長女の私が生まれたとき、養父は「この子は、自分のこどもだ。おまえの腹を借りて生まれてきただけだ。だから自分が名前をつける」と主張した。どんな話し合いがあったのか知る由もないが、結局、私の名前は祖父がつけた。そう聞いている。そして祖父は私を溺愛した。2年後、妹が生まれたときは、名前は父がつけた。祖父は、私だけに高価なものを買ってくれたり、旅行に連れて行ってくれたりと明らかに私だけを可愛がっていた。妹にはあまり関心を示さなかった。そういう祖父の態度を、母は受け入れ、父は私よりも妹に目

をむけていたように思う。

そんな家族関係だった日々。母が作った家族の幸せな生活は、私が交通事故にあったことで大きく変化した。私は5歳。幼稚園の年長組だった。その日は幼稚園の運動会。早くでかけたくて仕方がない私と妹は、母親の支度を待ち切れずに外へ飛び出した。家からほんの10数メートルのところ、向こう側に渡ろうとした私はダンプカーにはねられた。私のあとについてきた妹は、寸前でまぬがれ、家に走って戻ったらしい。母はそのときのことを、私にこう教えてくれた。

母：10月13日、金曜日だった。奈々がひとりで走って戻ってきて。「姉ちゃんが。車に。ひかれてしまった！」と言った。3歳の子が言う事だからと思ったけれど、「ひかれてしまった」という言い方に、大変なことが起きてしまったのだと察したわ・・・ あんまり祐美が「はやく、ママ。はやく運動会に行こう」と言うから、「そんなに行きたいのなら、勝手に行きなさい！」と言ってしまったのよね・・・

病院にいったら、足が包帯でぐるぐる巻きにされて泣いている祐美がいた・・・ 「ママ、ごめんなさい、ごめんなさい」って、泣きながら・・・ ママの方がごめんなさいだったのに・・・

医師からは右足を切断しますと説明があったそうだ。しかし、母は「なんとかして、足を切らないようにしてやってください。」と何度も何度も医師に頼んだ。その結

果、私は切断をまぬがれた。しかし、かなりひどい怪我だったようだ。その後は中学を卒業するまでの間に 27 回も手術を受けることになった。小学校・中学校の長い休みは、ほとんど手術のための入院だった。そして、必ず母は私に付き添い、個室の病室で母は寝泊まりした。夕方になると、母の食事をもって父親が面会にやってくる。祖父母にまかせられた妹は、寂しい日々を送っていた。退院後のリハビリなどの通院は、祖父がバイクに乗せて送迎してくれた。病院の帰りにチョコレートパフェやラーメンを食べさせてもらったりした。妹はそんな私をうらやんでいた。母は、相当自分を責め、つらい日々を過ごしていたのではないかと思う。事故にあった日の運動会のお弁当は、私のリクエストでサンドイッチだった。母は、その後、二度とサンドイッチをつくらなかった。

母は、私の記憶にある限り病弱だった。しかし、母親が早くに亡くなるとは思ったことはなかった。病気のために、入院することも多くなり、仕事は 47 歳で早期退職した。母の退職は、私の就職と入れ替わりだった。私が大学卒業し、地元の公立病院に MSW として就職できた私を、母はとても喜んでくれた。4 年間の京都での大学生生活を終え、私は両親と祖父母と再び生活することになった。

その後、私も妹も嫁ぎ、私には娘が二人、妹には息子が二人でき、母は 4 人の孫の祖母になった。母は孫を溺愛した。母は血のつながった家族が増えたことがことさら嬉しかったようだ。

私が次女を出産し、仕事に復帰したあと

だった。母から「最近、具合が悪い」と相談を受けた。「手がこんななのよ」と、指先が冷たく紫色になっていた。「レイノー症状」だった。それに加えて微熱・関節痛が続くというので、私が勤務する病院に受診をすすめた。すると、「膠原病（悪性関節リウマチ）」だと診断された。その時、母は医師からどんなふうに説明を聞いたのだろうか。私は自分の勤務する病院だったので、主治医から説明を聴くことができた。母は私に「岸 洋子と同じ病気やね」と語った。この病気のこと、母とあまり詳しい話をするとはなかった。少し病気の知識がある私は、不安になった。難病のひとつ。まずは医療費公費負担となる手続きを進め、「働きながら治療を受けている人もたくさんいるよ」と母に伝えた。それは私自身が「母の病気はたいしたことがない」と自分への暗示でもあった。

しかし、悪性関節リウマチと診断されてから、7 年間で 13 回入院。発熱、関節痛、骨折、薬剤性肝炎、循環障害による指の皮膚潰瘍と痛み、腸閉塞、間質性肺炎など次々と様々な症状に苦しみ、母は平成 10 年 7 月 14 日、61 歳で亡くなった。母の闘病生活については、次回書こうと思う。